

(朝倉)

皆さんこんにちは。

私は、豊橋市南部地域包括支援センターの朝倉といいます。今日は、豊橋市のなかの大清水校区の認知症サポーター活動事例について紹介させていただきます。

私たちの住む豊橋市は市電が走るまちです。こちらの電車はおでんを食べながら乗ることができる「おでんしゃ」といい、新型コロナの影響で規模を縮小しながらですが今年も実施が決まっています。ぜひ豊橋市に来たら、予約して、一度乗っていただけると嬉しいです。

それから有名なのが、手筒花火の発祥地やゴミゼロ運動の発祥地でもあります。右側の、写真に写っているのがマスコットキャラクターのアライグマのソージローです。これが豊橋市のマスコットのひとつです。

それから、他にもいろいろあるんですが、最近では、朝ドラ「エール」主人公の妻、古関金子さんのふるさとで、毎日テレビで豊橋が出てきたと思います。ドラマの中では「古山音」さんという名前が出ていました。ちなみに左側が本物、右側が俳優さんです。

それでは、豊橋市ですが、豊橋市は県の南東部に位置しています。豊橋市内には委託された18の地域包括支援センターがあり、今日発表させていただくのは市の南西部の4つの小学校区を担当させていただいていて、その中の一つ、大清水校区というところになります。

私たちの大清水校区ですが、まず一番下のところに豊橋市の人口、今年令和2年の10月1日現在ですが約375,000人。高齢化率が25.6%くらいで、大清水校区が人口6,145人、高齢化率は23.8%になっています。

それでは大清水校区、サポーターの活動について紹介をさせていただきます。まず、平成28年9月に、地域の活動として、ボランティアによる「訪問型支え合い活動」、大清水支え合いの会が始まりました。

活動内容は、買い物や草取り、ゴミ出し、電球の交換。あと、通院の介助だとか、家具の移動だとか、日常生活における依頼された困りごとを行うことをしています。ボランティアの方は70名ほどいて、全員が校区の住民で、認知症サポーター養成講座を受講しています。

支援の依頼は1人暮らしの高齢者が多く、地域の中だと顔見知りの方もたくさんいらっしゃって、支援するなかで、なにか今までと様子が変わるとか、元気がないとか、約束したのに忘れちゃったとか、支払いを何回もしようとするとか、怒りっぽくなったとか、異変に気づくことも少なくありません。そのために認知症高齢者の第一発見者になることもありますし、認知症サポーター養成講座を受けているので、偏見もそれほどなく、慌てることなく穏やかに対応すること

ができていないんじゃないかと思います。

こちらが支援の様子になりますが、先ほど、常滑市と豊明市は掃除とか買い物が多いということでしたけれども、こちらの方は草取りとか、ちょっとした庭木の剪定が結構多いです。地域のコーディネーターさんに依頼が入るんですが、一度下見に行きまして、依頼の内容の確認をしまして、この範囲だったら、今日は何人でどれくらいの時間でできるというだけ見積もりをしまして、数人で行くことも多いです。

その次なんですけど、支え合いの会ができた後、平成29年6月に、校区内にお住まいの認知症の方が行方不明になって、1か月くらい後だったと思うんですが、随分経ってから亡くなって発見されたということがありました。その時にそれを知った自治体の方が「もっと早く自治会に連絡をくれていたら、もっとみんな早く探せたのに」という声が上がって、この声をきっかけに、地域ケア会議を重ねていきまして、できたのが、大清水見守りの会です。ささえあいの会ができてから2年半後のことです。

活動内容に関しては、1番目、行方不明者が発生したときに、地域の中で回覧を回す、2番目、自治会代表者の連絡網がなかったんですが、連絡網を作成する、自治会代表者の中には民生委員、青パト隊などの大規模な横の連携ができていなかったの、横の連携を作るために連絡網を作成しました。

それから、認知症サポーター養成講座を受講する。

そして、行方不明者捜索訓練の実施を年1回ではありますが行っています。この行方不明者捜索訓練は、住民だけじゃなくて、校区内の認知症グループホームだとか、有料老人ホーム、通所サービスなどの介護関係の職員も一緒になり、実施ができています。

こちらが行方不明者捜索訓練の当日の様子なんですけど、捜索訓練の前に、認知症サポーター養成講座を受講しまして、そのあとに、行方不明者捜索訓練になるんですが、発信された情報をもとに探すほかに、サポーター養成講座を受けているので、声をかける実習のような形になっています。実際に講座を聞いただけでは、なかなかそこで終わってしまうんですが、実際に、声をかけるという、なるべく声をかけましょうという形で実施しております。

ちなみに、なかなか認知症役は、ご本人ということでは、なかなか難しく、スタッフ、スタッフというか有料老人ホームの職員や包括の職員が、高齢者役になっています。

豊橋市はもちろん、徘徊捜索ネットワークというのがありますが、市よりかなり早く自治会の方で発信できます。それで、より早く捜索が開始できています。校区内の方が市の徘徊捜索ネットワークで発信されるというのが、年に1人か2人ぐらいしかいないんですけれども、今までに、事例①って書いてあるところ、

市のネットワーク発信前に検索を自治会の方で開始して、早く発見できた方が2名ほどいました。

それから事例②のように、市のネットワークを発信して、他の校区内で発見されたのですが、そのあとこれではいけないということで自治会長さんが、ご家族さんに説得に行ってくださいって、そのあとは、そうなったときは見守りの会で早期発信ができたという方がいます。

ちなみにこの事例②の方ですけれども、最初の基調講演であった RUN 伴に参加したことがありますして、発見してくださったのはその RUN 伴と一緒に伴走してくださった大木家の職員だったというご縁があります。

発見されたのが自動車専用道路の入口、インターの入口でして、これはもうちょっと遅かったらどんなことになっていたかと思うと、すごく肝が冷えた事例でした。

その次にですが、令和元年9月に、校区内にある介護保険の施設で、子どもから高齢者まで、年齢に関係なく参加できる「多世代で食事をしながら交流できる食堂、もとまち集いカフェ」ができました。中心となっているボランティアの方が、大清水ささえあいの会とか、大清水見守りの会の認知症サポーターの方です。

活動内容は、食事、コーヒーの提供や、輪投げ、ダーツとか、子どもも楽しめる企画の実施です。それから会場近くに小学校がありまして、保護者と共に参加する子どもも多く、地域住民や会場となっている施設との交流の場にもなっています。

それから解放されている施設は認知症グループホームです。子どもから大人まで幅広い世代の方への認知症についての理解に繋がっているのではないかと思います。

それからカフェの方には、先ほどのささえあいの会のボランティアさんが、近所に住む認知症の方に声をかけて一緒に来てくださっているということもしてくださっています。

こちらがカフェの様子です。ハンドマッサージをされている方や射的をやっているお年寄りの方はささえあいの会のメンバーです。ほかにも、外で輪投げをやったりとか、綿菓子をやったりとか、イベントが盛りだくさんになっています。これらは全部ボランティアさんがいろいろ知恵を出し合って、企画しているのですけれども、先ほど6,000人ぐらいの人口のうち70人、ささえあいの会だけでボランティアがいるという人数が結構多いので、たくさんの企画ができていると思います。

もとまちカフェの方は、課題がまだまだありまして、まだちょっと始まったばかりなのですが、一つ目は会場である認知症グループホームの入所者の方

達との、本当にフリーな自由な交流はまだ持っていないということと、12月から4月まではインフルエンザ感染予防のため、また今年はそのあとに新型コロナウイルス感染予防のために、施設への立ち入りがずっとできないでいます。なので、もとまち集いカフェは開催できていない状況です。

この後なんですけれども、地域のお祭りとか、小学校の行事も自粛が続いていまして、校区内の自治会長さんが、子どもたちが楽しいと思える行事が今年は一つもありません。なので、一度でも良いから工夫して、このもとまち集いカフェが開催できないかという声が上がって、ちょっと話し合いを重ねて、あさつての日曜日に、このグループホームから場所を変えて近くに福祉センターがあるので、福祉センターに会場を借りて、カフェの開催を予定しております。ちょっとまた11月に、コロナが流行りだしてしまっただけですが、もう宣伝もたくさんしてしまっただけで、開催予定です。

まとめなんですけど、初めはささえあいの活動に始まり、行方不明者の見守りになり、そして多世代の、こういうカフェ、交流できるカフェというふうには、どんどん広がっていったと思われる成功要因なんですけど、ささえあいの会の活動があったということが大元だったと思います。認知症を自分ごとや地域の現状として、割とこの地域では理解できていたんだなと思います。

さらに、そのあとの行方不明者があっても、大事になる前に発見したいという想いからできた見守りの会や世代に関係なく集えるカフェに積極的に協力してくださったことで、かなり、次の会、次の会へと展開がとてもしやすかったと思われまます。

それから、サポーターが活動する時間ができることや、人の役に立っていると感じる場面ができることで、サポーターさん自身の生きがいに繋がっています。私は見て一番、大事だなって思うのは、サポーターさん自身の生きがいになる活動があるということだと思います。顔を見ていても、もう支援される方も、もちろんにこやかなんですが、一番いきいきとして輝いて見えるのは、支援している側だなんていつも思っています。

それから、今後の活動課題ですが、一つ目が、見守りの会が、市より早く行方不明者捜索活動を行ったとしても、保護できた2事例が、いずれも校区内ではなかったんです。隣の校区でした。市より捜索活動を始めたとしても、すぐに校区内から出ていってしまうという限界を感じていまして、そのために、隣の校区とか、興味のある市内の他の校区にも広げていくための周知活動をしなくてはならないなと考えています。

それから、見守りの会の活動は、高齢者や認知症の方だけではなく、子どもが行方不明になったときにも使えるよねというお話もしています。まだ幸い、子どもさんが行方不明になったということはないんですけど、そういうときに

も、ぜひ回覧や自治体の連絡網も活用して、早く搜索できるような仕組みになっていますので、そういうことも可能かと思えます。

それから、訪問型ささえあいの会「大清水ささえあいの会」とか、多世代の交流の場「もとまち集いカフェ」のボランティアの方ですが、70歳前後の方がほとんどです。なので、若い世代に、ボランティア、認知症サポーターとして増やしていくということが課題になっています。

それから、認知症の方への接し方とか、対応の仕方の先ほどの話にもありましたけれども、やっぱり人によって違うし、戸惑いの声もあるということで、フォローアップだとか、ステップアップの勉強会をしたいなと思っています。

あと地域の認知症の方の発掘と見守り、それから、ともにその方達の住み慣れた地域で暮らしていくまちづくりを、もっともっと勉強して検討していきたいという声もありますし、地域包括支援センターなどとの関係機関との連携をもっと、深めていく必要があるという声もあります。

以上です。御静聴ありがとうございました。